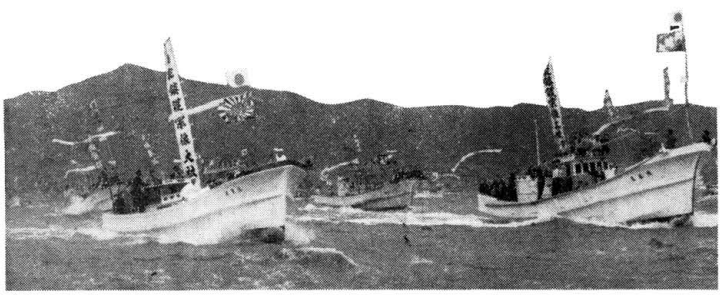
宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話神湊133番
定価一年送料共500円

宗像大社 秋の大祭……1日祭

波涛を越えて…海上パレード



宗像大社秋の大祭は、去る十月一日玄海洋上一大パレードで幕をあけた。

九州北辺から朝鮮半島を望むほぼ中間地点に在る沖ノ島、この島に鎮まる沖津宮さま、陸地に近い大島に鎮まる中津宮さま、この二柱の姫神を陸地の辺津宮にお迎えし、三宮お揃いの上で秋の大祭は斎行される。

沖津宮さま、中津宮さまを御座船に奉戴して玄海を巡幸しながら神湊まで供奉する宗像七浦漁業関係者の海の儀式、宗像大社海上パレードは、波涛砕け散る強風下に勇壮に行われた。

この日、午前七時頃から宗像七浦の各漁業関係者は、各自の持船に大漁旗、青竹に紅白の吹流し等満船にして各浦を出港、八時には大島に集結を完了した。

さしもの広い避難港も三百余隻の漁船で満杯となり、エンジンの音は大島の山々に響き渡った。

一方、中津宮拝殿では出御祭が斎行され、大島村長を始め、各関係者が深い祈りを捧げた。

この後、沖、中両宮の御神璽は輦台に奉安され、鐘崎漁協の有志奉持のもとに拝殿を出御した。

両宮御神璽は、今年の新造船の中から選ばれた御座船に奉安された。花火が数発鳴り渡る。出航の合図である。三百余隻のエンジンが始動開始。先導船がすべる様に出航する。この後に御座船、供奉船が続く。大島を出ると北西の風は意外に強い、波頭が白く砕けて飛沫が容赦なく船内をぬらす。青竹が大きく弓なりにしない、大漁旗がはたはたと靡く。

報導船には、取材班が乗り込み潮を浴びながらシャッターを切っている。

大島から地ノ島へと船団は進む。この頃から各新聞社のヘリコプター、セスナ機が飛び交い始めた。各漁業の無電の私語は禁じられている為、コース変更、船団編成についての指令だけが流れる。

その昔、玄界灘を渡航して朝鮮半島に交易した宗像水軍の偉容が想い起される。

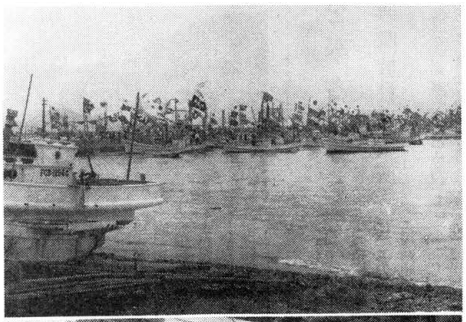
地ノ島から迂回して、船団は神湊を目差す。北西の強風は追風となり、大きなうねりも気にならない。白砂青松の海岸線に沿って船団は進む。神湊海浜の賑いが見えて来る。どの旅館も超満員、海岸ではこの盛儀を拝観する為の車と人々で一杯である。

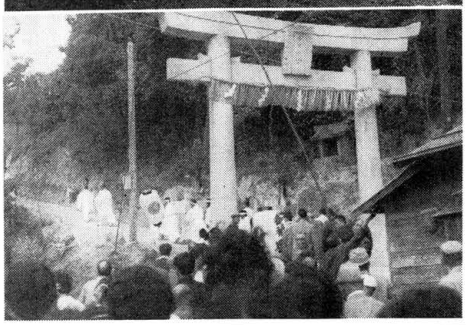
花火が神湊と船上から呼応するように鳴り響く。

先導船、御座船だけが船団を離れ波止場に入港する。

船団はここで散解し、各浦に船首を向け帰路につく。

久保宮司を始め関係役員が神璽を奉迎する。御座船から輦台に奉安された神璽は多くの人々の供奉のもとに新装なった頓宮へ向われ、大島居をくぐり高台の祭場に着御された。





（写真上大島に集結した漁船群
（〃〃下神湊頓宮へ登る御神璽）

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡支社　福岡市吉塚西林寺町　西林寺内
本社　電話 京都市下京区油小路通六条北入 (65) 六〇六六・三三三番
電話 京都 (35) 三三六・九七九番

論説

後列の知性

学識があるから、知性が豊かだとは言えない。大学の先生であるから、世間を驚かすような勉学家であるから、人間味の持ち主であるとは、決めがたい。

父は大学教授、母は女性としては稀な裁判官、とならべると一応学識教養ある人々が揃った文句のない立派な家庭と、誰しも思うのが当然である。この学識ある両親の子が、その弟を殺すという事件があった。さしたる事情もないのに、あまり例のないような悲劇を起している。大学教授なる父、人を裁く地位にある母、その家庭は学識を持つ父母はあっても、知性に富む親は不在だったと言えよう。

これと反対に、貧しい家庭に、生活に追われて忙しい労働に明け暮れる父母。その恵まれない境遇と見られる子弟の中から、育ちにくい英才が育ってゆく例も少くない。父母に学識はなくとも、無学文盲であっても、人間味豊かな後列の知性は、しっかりと存在していたと考えられる。

常に後列にある貴重なきずな、それは母性の知性である。ある時は夫の事業に成功の有力な導火線の役割を果たし、ある時は失敗の危機に苦辛の救援の手を延べ、その己れを無にした献身は、後列にある母性の知性そのものゝ現れである。更に尊いのは子弟の育成にそゝがれる知性、即ち後列のめだゝない現われない知性である。

愛情に出発したその知性は、まことに強く、不動のものとも言える。子供を養育し、世に出すために母性の細心の努力、これほど強固な知性の、不断の連続、理屈を超越して発動するものはない。

ある漁村に、その著しい発動の成果を見て、深刻に胸を打たれた類例をあげてみたい。決して単なる事談として考えたくなく、世相の変転の中に、発見する後列の知性の極めて貴重な存在を、噛みしめてみれば、吾人の満足は尽きるのである。

去る大戦は、働きざかりの壮者を多数戦場に送った。比較的体躯のよくない都会人にくらべて、漁村の労働に鍛えた壮者が、戦士になるのは当然である。その多数が帰らなかった。靖国の妻だ、遺児だ、と戦時の束の間は、賞めたゝえもしたし、特別に処遇もしたが、敗戦、敵軍の進駐と世情は逆転の様相を見せた終戦直後は食糧をはじめ物資不足の惨担たる民情。靖国の妻や遺児は、忘れられたかのような奇現象。こゝに不動の執念とも言うべき母性の知性が、まさに驚異の発動を見せた。

未亡人の一群は、昆をいたゞいて魚の行商に出て、月を仰いで家に帰る紛骨砕身の文字をそのまゝの、苦斗の毎日が続いた。

その結果を今日拾ってみたい。子供を最高学府を卒業させた。貧弱な家では、嫁をめとるにも肩身が狭かろうと、近代的設備をもつ立派な住宅が建設された。更に教養のない母では、子供の出世の障害になろうと、華道茶道を習い、字の稽古にまで丁寧を惜しんで励んだ。もう何も言うことのないほどの、母性の勝利、後列の知性を知らされたのである。

家柄や財力の上にあぐらをかいて、貧しい漁民の最低の生活を見下した不合理な因習を、靖国の妻や児が、終戦後の困苦の生活の中にみごとに破ったのである。まさに力量ある者の当然の帰結であり、知性の美しい結実であろう。ぼろをまとって荒海に稼いだ貧しい漁民の児が東大に学び、空疎な権勢の残骸にしがみつく名門の子弟が、愚鈍をもてあましている珍現象を、今日笑ってみつゝ、後列の知性の尊さを深刻に味わう。

話を一転して、現代政治の一施策として、託児所の増設拡充の声を聞く。如何に託児所が完備されても、少年幼児の生活に、母が欠けていては、決してよい養育も教化もない。サラリーマン職員が、恋母マリヤの慈愛があったとしても、その母の愛情、母子の肉親的結合には及ばない。託児所を必要としない家庭、政治の施策は母を家庭に帰えすべきである。子供を託児所に預けて働きに出なくともよい政治の情味ある妙手が、よき社会、不良児の発生防止のために先づ打出されなくてはならない。

後列の知性の存在しないところに、幾多の悲劇が生まれる。人間の本質を考えない社会政策も、福祉施設も根本が忘却されているものと言わねばならない。後列の知性こそ珠玉の貴重な存在である。

（白雲）

阿蒙少言

しぐれの野路、破れ傘をかたむけて、老いた農夫が行く、と書けば田舎といえども誠多に見られない今日の風物詩。俳人は俳句の好材料と見るだろう。農村に自家用車が普及した現代、破れ傘のとぼくゝゆく情景など、珍しい画題に属するかも知れないが、現実は幼少の頃から風雪にさえられ、不屈の根性を身につけた農民魂が、しぐれの路をいとわず行く姿と見たい。ふと貧しかった父を思う。破れ傘の老人に、在りし日の父を想いだす〇母のさとの墓参は度々しましたが、お父さんの先祖の地を知りません、一度捕って行きましょう」と、三人の手の申し出で、驚いた。同時にすまないと気づいた。負うた子に教えられて、墓参を思い立った。恥しい、若い子らが与えた貴重な教訓と受けとった〇五十年の昔、母につれられて参った墓の記憶はおぼろげに薄くなった。更に心中子らに詫びた。親子五人が林立する墓場で、先祖さがし。やっと見つけた先祖の霊にお詫びの合掌をさゝげた〇不孝な親が孝行な子を産んだ、道を説く身が子らに道を教えられた。二男坊が運転する車の中「お父さん、今日は嬉しかったでしょう」と、いや、悲しかった、恥づかしったの〇恥づかしい日が続く。大丈夫と折り紙をつけた知人の息子の就職が断られた。九分どころ大丈夫のせがれの就職を、自分の決断が鈍ったばかりに取り逃した。その罪を家族に着せた。汗顔また汗顔〇健康持のため飲んでは、ならない酒を又飲みはじめた。一かど悟りを得たようなことは言うが、難局に苦悶する弱い己れを知るだけ〇老骨の嘆きなど、さもあらばあれ。若い青春は愛を求め、幸福な家庭の建設を設計する。それでよいのだ。

（白雲）

第七十七回 宗像大社献詠歌会詠草

十月二十日　於社務所詠草到着順

戸畑　田中ハツセ
さゝくれし畳気にせぬ友の庭五十種のばら咲きほこりぬ

飯塚　萩本　夕照
一夏を妻と籠りし紺青の蚊帳を秋陽の庭に乾したり

久留米　篠田太郎坊
星あまた輝く中に華やげるはヘリコプターの灯が動くがに見ゆ

福岡市　林　まつえ
萩すゝきさゝ栗も見ゆる丘にきてこの故郷よ残れと祈る

遠賀　長畑　房江
連なれる山脈窓に近く見え身動かぬ我が心喜こぶ

南郷　中村　幸
背丈越す茅の堤分けゆきて用水池のひゞわれを見る

津屋崎　占部　由久
霙もなき大空に令団々とすみのぼりゆく今日の月かな

勝浦　永島　計七
星天つゞく砂廻舞う道走り来し重降りつゝ上着はたくも

宮田　片山　朔子
台風の余波なる風の強ければ体ごと振りて実肥施す

宮田　北原　君子
バイパスの架橋になるらし此の土地は売收済みて草のしげれる

宗像　井上陽之助
夕げをえて心静かに安らかさ忘れたけりり鶏舎のときしを

津屋崎　麦野　時雄
ロープウェー白雲縫うて仙人のさながら空とぶ姿学びぬ

村山田　吉田佐市郎
若葉もえ吹く風驚る氏神の奉仕掃除もすみてすがしき

田熊　鷲頭かつ代
イヤホーンにラジオを聞きてうららかの朝の眠りを覚まさじとゐる

宗像　永島　文子
集団の中の一人を意識しぬ河原青年の家や泊りて

福岡市　田中　嘉三
日本の十八度線いとかなし全連で又一人消ゆ

宮田　片山　一
ひろ田越え直線二糎踏切の警報のベル昏れて冴えくる

名島　吉田　信夫
秋冷えて黒める海の向い岸に白き家群の朝焼けに立つ

福間　松尾　豊
うから連れ湊の浜に白波のみあれ祭りの御座船（ミフネ）拝ろがむ

南郷　八波　五月
山川の自然に生きるようこびを見いだせし夫は病みぬきし如

深田　中野　節子
今日不意に丸刈りにせし吾児のさまかなしと思ふ試験終りて

吉武　原田　リノ
四人の孫送り出して火の消えしとき吾家を掃き出せり

田熊　小野角次郎
病床を教へ子の今日訪れて心強くと励まし帰る

田熊　小野かをる
朝凪げる有明海のしじまにたつるろの音枕辺に聞く

東郷　藤崎　辰子
重き包より現れし土産は土佐の石縞面白き桂浜の石

福岡　江崎　琴子
ろをたけく玉串かざし舞ふ巫女をうらがしとこそ霊もつくらん

福間　森　八蔵
宗像の昔を偲ぶ古城跡を探りて見たし春秋の山

大井　村山　幸生
運転は孫にまかせて自動車のたびおもしろき天草五橋

大井　木原　房子
健やかに生い行く児等の有難き精薄児等の映画見し夜

沖ノ島　佐藤市五郎
すこやかに仕へまつれのお言葉に仕へまつらむ心浄めて

田島　白雲　山人
いくばくも残らぬ命と知りてよりすくなき幸をかみしめて生く

福岡市　高橋　昇
やみくもに忙しき世の行末は光か暗か神代恋しき

陵厳寺　真鍋　万三
病院が存命ならば明るいこころ行くまで仕へまつらん

田島　楠本　正
いみじくも名付けそめけむ大観峰裾野の原に馬遊ぶ見ゆ

田島　宗像　清文
大千木は真空の夜を貫きて諒暗の森は静かに眠る

田島　乙守　信平
五十年生き長らえし我が命流るゝ笹の悲しきに似て

十一月のまつり

一日 勅祭請願祈願祭

三日 明治祭　午前十時

もとの明治節にあたり、この日は明治天皇の御降誕日で、明治以降明治節として祝われ、戦後は文化の日と改められた。

明治百年を迎えるにあたって、明治の偉業を想い、今日の平和を感謝し、あらゆる文化産業の振興を祈念する祭典を行う。

七五三祭　一二日——一五日

七五三の習俗は古くからあり、武家時代には男子の五才の祝いを「はかまぎ」、女子の七才の祝いを「帯とき」等と称した。当社では、十二日から十五日まで、子供の成長を祝って七五三祭りが行われる。

一五日 月次祭　午前十時

二三日 生産感謝祭　午前十時

神社では、この日の祭りが新嘗祭に当り、天皇が新穀を天神地祇にすすめて、感謝の祭りをせられまた親しく新穀を食せられる儀式がある。神社では新穀をお供えして、今年の豊作を感謝し、産業文化の発展を祈念する祭典を行う。

今月の言葉

神道といえばずらしき事と覚ゆ。或は神職の所作を神道と心得、愚かなる人は唯奇怪な術の類を神道と観ゆる人多し。士農工商の業、則ち神道なり。

神道と言うと、世間では神主の行う儀式とか、山車の祭礼等を指すものとしているが、誠の神道はその様なものでない。百姓が農業に励み、漁師が漁業に精を出し、商人が商いに一生懸命になる、その事が神道なのだ。一日を悔いのないものとする事が即ち神の道に適う事なのである。

空前の賑い　宗像放生会

——みなと祭り行われる——（一日—三日）

当社秋季大祭は、十月一日から三日まで盛大に斎行された。

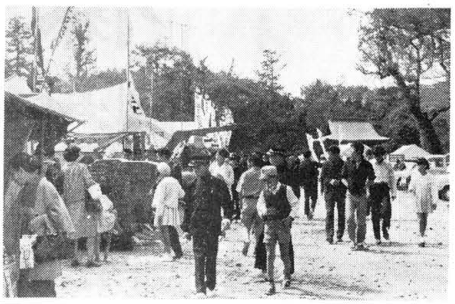
本年は予てからの念願であった神湊頓宮（御旅所）祭場がほぼ整い、みなと祭りが神湊地区各位の御協賛によって斎行する事が出来た。

九月三十日、午前十時辺津宮出御祭が行われ、神、中、両宮様お迎えの為辺津宮さまは頓宮に向われた。

神湊では、戸々門口に国旗、提灯がかかげられ、始めてのみなと祭りの喜びが溢れていた。

午后六時、宵宮祭が行われた。日没ともなると参道に飾り付けられた数十ケの提灯に一斉に点灯された。赤々と飾された頓宮の一角で、小、中学生の奉納相撲大会が開かれた。頓宮下の仮設場で、神湊西部社中による獅花展が設けられ、夜半まで参拝される人々の目を楽しませた。

翌一日、海上パレードの後、沖津宮さま、中津宮さまは頓宮に還御、三宮お揃いになり頓宮祭が斎行された。午前十一時で



あった。

日曜日と重なった為か、神湊は人と車で埋まり町並の陸上神幸の際は、行列が屢々駐まる程であった。町外れからは、例年の通り自動車による神幸で、長蛇の如く自動車の渡御行列が続いた。

正午、三宮御神輿は辺津宮に入御され、御本殿奥深く鎮座された。

やがて、大太鼓がとどろくと鳴り響き秋季大祭が斎行された。この頃には、境内は参拝者で埋まり、見世物の呼び込みの声、商品の宣伝、バナナ売りのざわめき、迷い子の呼び出し等で、祭りの雰囲気は最高頂に達した。

祝詞が朗々と奏上され、宗像地方に由縁ある風俗舞、郡内女子中学生奉仕の浦安舞等が奉納された。

第二日祭は、午前十時に斎行され、この後、氏子会永年奉仕者の表彰式が行われ、深田和一郎氏外七名の方に表彰状と記念品が贈呈された。

宗像大神を奉斎

出光興産若松出張所

九月二十五日午前十一時、出光興産戸畑支店若松LPG充填所に於て宗像大神奉鎮祭が斎り行われた。

神職はこの日午前九時二十分辺津宮をお発ちになり夜来の雨に清められた国道三号線を一路若松へ向け東上。遠賀川を渡り北九州市内に入るにつれてスモッグで大気の色が灰色となる。海岸近くなるとスモッグが次第に潮風に吹き払われる。と、赤い鉄符の若戸大橋が目の前に現われる。車は橋のたもとを左折し球状のLPGタンクが白く輝く事務所へ到着した。

真武所長以下従業員の奉迎をうけて神職は恙なく御鎮座になった。

「皇大御国の大御栄の御為、此の充填所と従業員等を永く久しく守り恵み幸へ給へ」

祭典を終え真武所長から若松LPG充填所の必要性についてお話を伺う。

①最近LPGの需要が非常に増加し、北九州市中、若松区は特にタクシー等による消費量が旧五市中で最高である。

②徳山よりの海上輸送に便利である。

とのことであった。

若松は、古くより洞海湾（くきのうみ）の門戸を拓き枝葉の地で対岸の戸畑の遠洋漁業根拠地と共に石炭の積出港として著名であった。今日それが燃料革命による石油系燃料の供給地となった。これも時代の推移であろう。此の秋に当り新時代の行手を示すかの様にこの地に宗像大神が祭られることは真に意義ある事と言えよう。

志賀海神社秋季大祭奉仕の為升谷

宗像談話室　母の死を喜ぶ

「おふくろが、あの頃死んでくれてよかった。明日はシャベルで力が一にも生きられない母の病状だったが、若し生きていてくれたらと、今度は母の死を喜ぶどころではなく、しみじみ追慕の情が湧く。狭いながら、この家にこの庭に母を迎えて喜ぶ姿を見たらと、夢想する。時。戦場の夜は母の死を喜び、今は母ありせばと悲しみを持つ。

少しは孝行の味を知るようになったのも、自身の生命の終焉が近しくなったためだろうか。

有り日のたらちねの母

給ひし文をふと今日も見つ

胸猛るる秋しさよ

日沈みて薄ばら色の空

西の方染めぬ

夏の夜の夢に出でませ

母が子の固きしとねも

国守の土のしとねとなる日

間近し

この戦没兵士の母を想う詩情を借って、生前の不孝をわびる。戦場での感懐の誤りを、自らあらためたい気持切実なものがある。

——狸庄庵茶話——

戦死者や負傷者の処理に、疲れはてた兵士の苦労も大変である。負傷者を或は背負い、或は担架でとぼくと運んで行く兵士の一群が、凄惨な日没時の戦斗、敵が山頂を放棄して退却したあと、味方の死者の処理の方法は、シャベルで首をたゝき切る作業。コツくと首をたゝき切る悲痛の音が、闇夜の峯に響く。

去って、残った者が屍体の仕末にかゝる。骨えたつ連山の頂上線、あと仕末が終り、山を下る小人数の隊列の後尾にあって、毎度ながら、つぶやいた。

「おふくろよ、お前は幸せだ。不孝者だった。どうせ今までは、家族が見ていないからよいものの、一日見たらどうだろう。血のこの首をたゝき切られても、母が生きていないことが、何よりの安心だ」

だが、幸か不幸か、仏印国境の山獄に倒れず、生きて祖国の土を踏んでみると、又終戦後の平穏な国情にかえってみると、母が今日まで生きていてくれたらと思う日がある。

決して子供の頃から孝行な児ではなかった。変てこな自慢だが、

中学相撲大会

秋季大祭奉納郡内中学校相撲大会は、郡中体連主催により秋晴の好天気に恵まれ、万余の参拝者で賑う境内相撲場で盛大に挙行された。今年は丁度第十回の記念大会に当り、十三チーム、百七十名各学校特別休暇にして郡内中学生各位応援につめかけ、大喚声の中に熱戦を繰り展げた。尚、当日の入賞者には、各々賞旗、出光旗、KBC旗、県議旗、氏子会長旗を始め数々の賞品、賞状が送られた。成績は次の通りである。

団体の部

一位　中央中学校
二位　城山中学校
三位　玄海中学校
三位　津屋崎中学校

個人の部

"一年"
一位　田畑浴末（福間）
二位　久田一保（玄海）
三位　蜂須賀英俊（福間）
〃　早川寿和（玄海）

"二年"
一位　大野宗明（津屋崎）
二位　中村宗人（福間）
三位　河野清幸（大島）
〃　花田正幸

"三年"
一位　真武清志（中央）
二位　中山康弘（城山）
三位　七田裕之（玄海）
〃　石橋龍吾（玄海）

境内入口に道路照明燈寄贈さる

県道に面する当大社境内の入口に、このほど九州電力株式会社から道路照明燈が寄贈された。

神社の前を通過する県道（玄海線）は当神社の参拝自動車を初め玄海ゴルフ場、神湊方面に行く車輛が年々急増し、地元からも道路照明の要望が出されていたが、この度宗像警察署の協力により設置の運びとなった。七メートルのポールに五百ワットの水銀燈がつけられ、去る十月一日の秋季大祭を記念して、点燈が行われた。

社務日誌抄

三日 秋季大祭第三日祭午前十時より斎行、南坊流献茶式行われる。

四日 出光興産徳山製油所宗像神社秋季大祭、久保宮司以下職員四名出張

七日 葦津権宮司東郷老人クラブに於いて講演。

一一日 大阪市立博物館安井良三氏外二名、沖ノ島神宝出品収納の為来社。

一二日 RKB全国ネットワーク企画部長会十五名参拝。福岡教育大学関係者十名参拝。

一七日 中津宮秋祭り祭仕の為保宮司以下職員三名出向奉仕。

一八日 出光興産横浜支店長荒木幸三郎氏外二名参拝。

権称宣出張

一一日 中央中学校
三氏外一名、沖ノ島神宝出品収納の為来社。

一二日 RKB全国ネットワーク企画部長会十五名参拝。福岡教育大学関係者十名参拝。

一七日 中津宮秋祭り祭仕の為保宮司以下職員三名出向奉仕。

一八日 出光興産横浜支店長荒木幸三郎氏外二名参拝。

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社　大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話　宗像局2027　有線277—1　番

この一隻の旗風

（其の十一）

葦浦柴舟　作
福田長庵　画

建武三年三月二日未（ひつじ）刻（午後三時）尊氏の一行は香椎の宮に到着した。

ここで神人の出迎えを受けた一行は静かに神前に跪拝（きはい）し戦勝祈願の願書を納めた。すると神人が杉の小枝を差出し、「敵は皆笹の葉を笠印に致しています。これは御方の御笠印になされませ。」

と、杉の葉を尊氏の鎧の袖につけた。

この神人の言葉で、直ちに全軍のよろい、かぶとなど味方の印がすぐ判別出来るよう各自思いくぬの処に杉の小枝をとりつけた。

「それっ、全軍多々良に向けて出発だ。」

尊氏の一行は香椎より多々良の丘陵帯へ馳けのぼった。総勢二千余騎これらの諸将はかねての打合わせに応じ、三百、四百の集団に分かれ、各部署へ地理に応じ分散した。

尊氏は本陣を〝陣の越〟の台地に置いた。その他の一行は、名島葦牟坂、松ケ崎など長く横に布陣して敵を待った。

許斐三郎康氏が率いる宗像党は浜男明神の後に面する浜辺の小松原に陣を取った。

まだ敵の菊池方はまったく姿を見せない。その先鋒すらもみあたらない。

「よし今のうちだ布陣を固めよ」

渡辺小太郎晃忠の号令で松原の小枝に次々に白旗が立てられた。数百の旗が乱立し、あたかも大軍集結の感がある。命令が下る迄この松原より一歩も動いてはならぬぞ。ぬけ駈けは許さぬ。宗像党は一致結束するのだ。

克忠は一心に兵の団結を呼びかけた。

それから一刻（とき）ほどたつと筥崎方面から多々良にむけて菊池の軍勢が現われだした。以前から大軍だと予期はしていたが、野にも海辺も埋め尽し、ものすごい。

その中で菊池武敏は尊氏方が地の利に処っているのを見て顔をこわばらせた。

尊氏の本陣〝陣の腰〟を名島の方から望もうとすると、砂風がふきなぐり、目もあけられない。

「うむ、これは方向が悪い、なんとか風を背には出来ぬか。」

しこちらは二万の大軍、尊氏方に先を越されました。しかし「敵方に先を越されては勝ち目はない。」

と思い、機に乗じた尊氏方の仁木義長、千葉大隅らの兵が益々追い打ちをかけ、みるまに阿蘇惟成（これなり）は負傷し、以下数百の死傷をこの退路に出してしまった。

次第に日は暮れ、浜の手も野面（のづら）もいつしか暗くなった。未だ逃げくずれた菊池方の兵を追っているようだ。

許斐三郎康氏はこれを眺めながら深追い長追いはよくないぞ、とつぶやいた。

すると、ほどなく退貝（ひきがい）の音が鳴った。——

しかし逃げ足にさそわれて敵中に入り過ぎて帰らぬ者も二、三あった。それらは敵の重囲に陥ったのであろう。されど未だ方の傷は浅い。油断はならぬが、明日こそは決戦だ。

まづ酒に体でもあたため、充分に身を休ませよう。

許斐三郎康氏は指示を終ると、何事もなきかのように深いねむりについた。

（つづく）

早速二百騎ほどで敵をついてみましょう。」そう答えた城（じょう）ノ越前守は夕陽を背にして菅原に兵を進めた。

すると尊氏方の伏兵が砂塵をめぐって越前守を取り囲もうとした。

「あぶない!!ひがしの菅原には敵が雁の群れの如く隠れているぞ、注意を致せ。」

この小ぜり合いで、各所に吶喊（とっかん）の声があがった。

宗像党の兵達も足がいさみ、許斐の身を待ちわびている。

「待てくそう急ぐな菊池の動きは未だ本調子ではない。」

と筥崎方面から多々良の心をなだめ

×　×　×

仲秋を飾る宗像献茶祭

宗像の秋を色どる大献茶祭は、去る十月十五日、表千家家元直々奉仕のもとに、宗像大社に於て盛大に行われた。

前日の十四日は、三カ月余りも続いた晴間の天候が小雨模様となり、一抹の不安を抱かせたが当日はからと晴れ上り、秋晴れの上天気となった。

神苑をわたる爽やかな風と共に、早朝から色とりどりの晴着に趣向をこらした女性の群れが境内を埋め、宗像大社が女ノ園と化した観があった。加えて当日は日曜日である為一般参拝の諸車、そして献茶式参列の人々を乗せた貸切バス等が続々つめかけ、交通整理の職員は車を誘導するに汗だくの有様。

定刻午前十一時、表千家即中斎千宗左宗匠は九州同門会高弟を従え静かなる足取り殿、出光興産株式会社出光佐三店主、玉屋百貨店田中丸善八社長他関係者、同門会千百余の多数参列のもと、一同緊張の中厳そかなる祭典開始、修祓に続いて祝詞が奏上され、宗匠は拝殿中央白木の台子に据えられた風炉の前に端坐し、まず炭point を持ち出して炭を直し、静かなる中にお点前され、参列者の寛ぎのもある中、金、銀の茶碗に濃茶、薄茶とたてられ神前にお供えされた。この後玉串の奉奠がなされて式は滞りなく終了した。

又午前十時より斎館大広間においては出光興産による副席、清明殿に於いては表千家九州同門会による副席が設けられ、この副席に臨む盛装あでやかな女性の群が長蛇の列をなし、この副席を待つ人の列は午后四時迄続いた。

因みに、千利休奉仕のもと盛大な禁中茶会が催されたのは、天正十三年十月であった。

神前に於ける献茶式は明治十年頃を始めとしている。

当社に於ては、出光興産店主の援助で昭和三十七年から実現、西日本での恒例茶会となって本年で六回目を数えている。

来年は九州全域の茶会とする計画もあり、益々盛大さを加えゆく事であろう。

〝覚えていますか〟
道交法一部改正
（十一月一日施行）

道路交通法の一部が改正され、去る八月一日に公布された。十一月一日から施行されるので、ここにその要点を紹介する。

横断歩道における歩行者の保護規定が追加される。

1、一時停止の義務
2、追い抜きの禁止

1、交通整理の行われていない横断歩道の直前で、停止している車があるときは、その横を走り抜けてはならず、歩行者の有無を確認するために一時停止が義務づけられる。

要するに横断歩道前で止っている車がある時は止れ、横をすり抜けてはいけないと云う事である。

2、旧法では、横断歩道の手前三十米以内では追越しは禁止されていたが追い抜きは禁止されていなかった。新法ではこの追い抜きも禁止される。

大型自動車について規制の強化

大型貨物自動車にあっては、運行記録計（タコクラフ）を備え、その記録を保存しなければならぬ事が義務づけられる。

積載制限違反の罰則が強化される。

運転資格が引き上げられる。

大型車の運転資格は、十八才かニ十才以上に、ダンプカーは二年以上運転経験を積んだ者と改められた。

事故の現場で、免許の効力が直ちに仮停止される。

悪質重大な交通事故があった場合その場所を管轄する警察署長が、即時に、その運転者の免許の効力を仮停止する事が出来る。これは公安委員会が取消し又は停止するまでの間の危険を防止する為、新に設けられたものである。

また昭和四十三年七月一日より反則金制度が新設される

軽い違反に対しては、直ちに刑罰を科する事をせず、反則として取扱い、反則金の納付を通告し、納付した者については、裁判所に廻さず簡単に速く違反を処理しようと云うものである。

又昭和四十三年九月一日から軽自動車、軽免許がそれぞれ、普通自動車、普通免許となる。

宗像の諸城
城址を訪ねて（二）

一地方武士としての宗像一族は、鎌倉時代にも度々の武勲をあげ、南北朝時代以後は、武家の一員として活動すると共に、朝鮮貿易にも進出し、宗像族の経済的地盤をより大きくし、その勢力は他の豪族の注目するところとなって来る。

かくて攻防の場としての構築物が考案されて来るのであるが宗像の諸城に言及する前に城の概略についてふれて見たい。城と云うものは各時代の政治、経済、社会、他国との関係さらにはその時代に使用された武器、戦略等に伴って形式、構造にそれぞれ大きな差がある。

北九州地方に於ける城の最も古い形式と思われるものに、古代の神籬石がある。これは、山の頂から谷を横断して、巨岩（一メートル余りの方形石）を並べ、谷の最底部へは水門を設けたもので、東北地方や北海道の蝦夷の遺跡にみるチシャ（柵）とか、中国の万里の長城を小型にしたものに匹敵する。しかしこの神籬石は城でなく神域を表すものだとする説もあ

そえの山城や、野城の様な臨時の城から、何事にも便利な平地へと移ってくるとともに、城の姿自体も平城と呼ばれ、高い石垣の上にドッカリと座った見事な一大建築の誕生となる。

今日、現存する城の代表として「姫路城」があげられる。別名を「鷺城」と呼ばれ、最上の美を誇っている。

共に、築城技術の進展に伴って城建築の最盛期となる。

この頃になると城は、これまでの単なる防御的施設だけでなく、その地方の政治、経済をも示し、領内はもちろん他領の者の心を感じ入らせる威厳を示すものとなってきた。

つまりこれまで戦中心の山上の城ではなく、平時には領主の居館を山麓に堀などを設ける程度の規模のごく小さいものである。従って城としての建築には見るほどのものはない。

中世の戦国の世も室町時代になると、戦は城を中心として行われ、戦によって城はやがせないものとなり、城は小規模ではあるが復雑化し、組織的なものとなって来る。

やがて室町時代末期から江戸時代にかけ、天守閣や二ノ丸、三ノ丸に対し多くの曲輪が設けられると

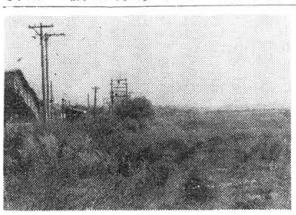
赤間駅南側を開発
――商店街誘致計画実現へ――

去る十月二十日、赤間駅南側埋立地の一画で、駅前整理組合の整地起工式が当社の司祭で行われた。

宗像町赤間は近年福岡教育大学、東海大学福岡分校、八幡製鉄団地、宗像森林都市等が誘致され、益々発展を重ね、宗像町の人口の増加は急速度に伸びている。赤間駅は、この宗像ベッドタウンの表ノ関に応じ民衆駅として再建すべきだとの声もあり、この趨勢に鑑みて、駅前商店街地所有者が相計って土地整理組合を結成、ここに区画整理を行い、分譲する事になった。

現在は見渡す限り黄金色の稲穂がゆれているが、数年のうちに駅前商店街が建ちならぶ事であろう。

分譲価格は未定で、総面積三九〇ヘクタール　吸排水はもとより防災についての対策も考慮されている城山を卸く景勝の地である。



話題の新車をみる（五）
ニュークラウンの巻

トヨペットクラウンは誕生以来十三年と云う長い年月人気車種として各層から高く評価され親しまれて来た。この車もトヨタ自動車は三十七年八月のフルモデルチェンジ以来五年振りに、去る九月十三日四回目のフルモデルチェンジ車として全国一斉発売した。高速時代にふさわしいスタイル、操縦性、居住性、サービス性に重点をおいて製作された格調高い車の華やかなる登場であるはけても安全性と云う面に苦心の跡が見えるのが一つの特徴であるトヨタ自動車独自の考案になる組込式ヘッドレスト、ランプ類の完全別系統ヒューズ、急ブレーキをかけた際におきる後輪ロックを防ぐにつき、P・V・C装置の取り付け等十六項目になる安全性重視の設計をなし、加えて米国安全規準二十項目の中、日本にて禁止されている4ウェイフラッシャー、エネルギー吸収ステアリングを除いてはその全てを採用している点が注目される。又プラグ交換、オイルエレメント交換、ガストレーナーの清掃、オイル点検、スクリーンウオッシャー液の補充、バッテリー液等の日常点検を容易ならしめている。その他にもラジエーターは密封リザーブタンクの採用により、二年又は四万キロ無給水可能、エアクリーナーのエレメント交換は三万キロ迄延長された事は多忙な毎日をすごすオーナーに取って朗報であろう。旧型クラウンよりも更にまとまった感じを見せているのもこの車の特徴であるが、フロントグリルに、国産車としては最初の試みとも思われる合成樹脂を使用して軽量化に役立たせている。

今回のモデルチェンジに際して従来のM105PS,5200RPm、六気筒エンジン搭載のスーパーデラックス車と共に、トヨタ2000GTの経験を生かしたMD型110馬力エンジン搭載のスーパーデラックス車を同時発売した。

トヨタ2000GT

フロントリヤ共に組込み式ヘッドレストを持ち、ラジオはFMチューナー付き、秒針音又時計と豪華である。全長4665、幅1690、水冷直列6気筒SOHCエンジン、総排気量1983cc、最高出力100馬力（5600回転）、最大トルク16キログラムメートル（3600回転）車輪重量1310キログラム、前ブレーキはディスクブレーカー付、後はデュオサーボ式ドラム、クラッチは3要素1段2相型トルクコンバータ、トランスミッションは前進3段全自動コラムシフトとなっており、車両本体価格112万円、3段コラムシフト、トヨグライド付は7、5万円高となっている。

新刊の窓

「広瀬武夫」

現在、広瀬武夫と云っても世間では余り知る人もあるまいが、旅順港口閉塞の時、杉野兵曹長を捜し求めた広瀬中佐と云えば、軍神広瀬中佐を思い出していただけると思う。

この書は軍神広瀬中佐の伝記である。広瀬中佐は明治元年五月二十七日大分県竹田町に生れ、同二十二年四月二十二才で、江田島の海軍兵学校を卒業した。その後海軍の要職を次々と歴任、明治三十七年二月、日露開戦が行われ同年三月二十七日午后四時に第二回旅順港閉塞決死隊として出撃し壮烈なる戦死を遂げた。

本書は明治の歴史的背景にふれつつ、広瀬中佐の生い立ちから青年期のロシア外遊、秘められたエピソードを交えて、明治の武人、広瀬武夫を明らかにしている。特に広瀬武夫の文学とも云うべき詩文に紙面をさいている。

本年五月二十七日は広瀬中佐誕生年にあたり、時まさに明治百年を迎えんとしており、本書はそれら記念して出版されたものである。

本書は次の十六章に大別されている。

広瀬武夫と海洋文学
〃　と観音精神
〃　と鉄拐、清水次郎長
〃　とロシヤ時代
〃　とロシヤ研究〈I〉
〃　とロシヤ研究〈II〉
〃　と日本道
〃　の祖母と母
〃　の飛躍高山時代
〃　の父とその同志
海軍兵学校・水雷学校時代
広瀬武夫と旅順港閉塞
旅順閉塞を賦する書簡
広瀬武夫旅順口に散華
明治自年の意義
あとがき

本書は歿人である元野島村長武下可青氏の執筆によるもので、B6版一五頁、頒価三五〇円、講読御希望の方は左記にお申込み下さい。

福岡市警固二丁目六番地一三二
社会奉仕部園

×　×

宗像伝説　其の七十六
黄金塚

津屋崎の老舗、大阪屋の手代幸吉の足どりは重かった。

話は今から九十年前にさかのぼる。

幸吉は、今日も為屋まで、金策に出向いての帰りであったが、金繰りは思うにまかせず、とぼとぼと宝満の街道を歩いて勝浦まで来た。

落日の秋の日は折悪しく冷たい秋雨の降りそぼる日和と変り降りしきる雨を除けて、幸吉は並木の大松の下に休息する事にした。

さて、津屋崎の町は、黒田藩によって、開拓されたと云う広大な塩田を有し、沿海よりとれる豊富な魚貝、近郊野よりの産する綿万石の米穀の集積地として栄えていた。

大阪屋はこれ等、幾多の産物問屋として、手広い商売を行い、中でも、遠賀郡芦屋の港より大船を立て、大阪、堺までも積出し、巨万の富と名声は筑前近郷はもとより遠く上方までもきこえていた。

しかしながら、維新の改革の波は、中央より遂に九州にまで及ぶに至り、新しく興った資本主義の嵐と、新政府に追従する御用商人等のあくどい商法の前には、さすがの大阪屋も抵抗する術もなく、家運は次第々々に傾いて行くばかりであった。

大阪屋の運命をかけての金策も遂に徒労に終った今日、百数十年にわたった大阪屋の高き歴史と名声とが土台から崩潰し去るを思うとき、いたたまれない気持になり、独り厩舘みして、秋雨のしずくの中に深い思いに沈みつけた。

と、幸吉は、すぐ前方に広がる平野の一隅の小高い丘を見つめた。

この丘こそ、実は黄金塚と呼ばれる古墳であった。この勝浦より棟原、新原に抜ける街道筋は無数の古墳群が存在していた。こ

れ等、古墳群はかっての宗像水軍の勇者の墓であり、一きわ大きい此の黄金塚こそ実は宗像の統領、宗像君安曇の墳墓であり、幾多の金銀財宝の類が共に埋葬されていると伝えられていた。しかし、この財宝を侵し荒らす者はたちどころに神罰をうけ、狂死するとも云われ、誰一人として盗む者もなく千五百年間常に神秘なる宝庫として静かに眠っているのであった。

幸吉は、遂に此の黄金塚の財宝を盗み出して大阪屋再建の資金にあてようと冒瀆した。

金の亡者と化した幸吉は秋雨に冷え切った薄の群をかきわけて古墳の入口をさがし出すと、はいつくばって、手さぐりに、羨道を進み、玄室の石戸を力一杯に押倒した。

幸吉は用意のローソクに火をつけた。石室は方二間、高さ一間程度で強石で組合わされて、小部屋を成して、中央に安置が眠る石棺が安置されていた。ローソクのほのかな明りはかすかにしのび来る夜風にゆらぐようにゆき、無気味な妖気をただよわせる。とほの暗い石棺の頭部にあたる一隅にわずかに、にぶい黄金の影が見出された。狂うくとりかけてみると、どっしりと重い黄金の柵であった。

大阪屋はこの黄金の柵を売払い、莫大な金銭を得て、一時商売は持直したかに見えたが、その翌年四月日庭内稲荷社の盤明の火で思わぬ大火となり、身代くるみ焼失してしまった。

又、手代幸吉は雨のしとしと降る夜ともなれば、決って気にならなれ「金は返すべく」とわめき、一年後亡くなってしまった。

その死因を知る人等は、これは墳墓の呪いだと噂した。

黄金塚は、その後耕地整理でとり払われ、畑となってその面影すら留めていない。

（H）

宗像大社献詠 俳句作品集（五十九）

津屋崎　白石百合蔵
鷺の来て青田の風に首のせる

久留米　篠田太郎坊
たわゝなる柿ふり向かず児等遊ぶ

田熊　小野淡坡
放生会や緋鯉真鯉の川広し

田熊　小野花居
水や空天草五橋鰯雲

宗像　中野きみ
真白なる丘の大学初紅葉

福岡　広田美津
波の花ひるがへりゆく秋燕

大井　木原房子
運動会踊る輪に居てなお孤独

津屋崎　久羽整王
月出でて低き台地となりにけり

〃　毛利夜潮
さるびやの長紅いにして悲し

〃　西住喜三郎
裏窓に迫る山塊十三夜

〃　鶴賀水
かんな燃ゆ工区のどこも安全旗

〃　井浦良介
月の海を航く軽快な音たてて

〃　勝田洸一
ピカソ観る秋陽に森はすぐときれ

出光佐三一問一答シリーズ ⑮

マルクスが日本に生まれていたら

戦前の例としては、第一次世界大戦のときに、出光のお得意先には供給を完全にやり遂げ、価格も暴利をむさぼらなかった。その結果、出光としては金儲けはしなかったが、得意先の信用を非常に得て、得意先を獲得したというようなことがある。戦後は、例のスエズ問題のときにも、消費者に価格、供給に少しも心配をかけず、消費者をして本業に専念せしめた。

これは一つの例だが、あらゆる場合に、出光が消費者のために働いているという実績があるから、それが最近芽をふいてきて、消費者のほうも、石油は出光にまかせようというようなところがどんどん出てきている。最近、或る大会社のごときは、出光さん、値段を上げましょうよ、というようなことを向うから言ってこられた。これは、出光が生産調整で圧迫を受けて苦しんでいるのを知っておられ、出光は市場で高いものを買って、われわれのほうに納めているのだから、価格を上げましょうよ、ということなんだ。これはもう出光に油をまかせておけ、ということで、消費者が出光の家族主義に同調している証拠だ。消費者と、出光の間は、対立ではなくて信頼だよ。これが日本人の和の経営のあり方ではないかと思う。こういうことは、対立の思想の経営にはありうべからざるもので、日本人の信頼の経営には、大家族主義がそこまで広がりうるということを示している、ぼくは非常に喜んでいるわけなんだ。マルクスも、このような消費者のために尽くすとか、家族主義で、お互いに信頼し、助け合って行く、互譲互助・和のあり方を望んでいたといえるのじゃないか。それをマルクスは、無理に対立闘争の道を歩かせられたということだね。

対立の思想と信頼の思想との相違が、われわれ石油業でさえも、そのくらいの影響があるから、この日本人の信頼のあり方を世界に拡めることは、世界の平和・福祉に大きな影響があると思う。それが日本人の務めじゃないか、ということをぼくは言っているわけだ。

13、尊重すべき人間は愛情と鍛練によって育つ

出光　そこで話を本筋にもどすが、さっき、出光は搾取はないとか、社員全部が経営者である、ということを言ったが、それではどうすれば、そういう経営になるかということが問題だ。それは上に立つ人が、愛をもって従業員を育てる、そして自ら率先して努めて、難関に向かってこれを鍛練すること以外にはないと思う。愛によって鍛練する。鍛練は口先で従業員を鍛練するのではなくして、上の人が身をもって先に立つということだが、そこにはじめて尊重される人間が出来てくることになる。出光では開店後から終戦まで、そして現在まで、ぼくがいつも先頭に立って、社員とともに苦労してきている。出光の若い人が強いのも、そこに原因がある。

こういう行き方は、経済学で言う経済原則とは全然違う。経済学では、最小の労力をもって、最大の効果を収めるということをいうだろう。経営でいえば、なるたけ働かずにイージー・ゴーイングをやって金を儲けるということになると思うが、ぼくはその行き方を採らなかった。同じところに達するのに、最小の労力をもって、最大の効果を収める道と、難関を通っていっても行ける道とがあるならば、ぼくは自ら選んで難関を通ってきた。難関を通るということは、人間を養成するということだ。イージー・ゴーイングをやったならば、金は儲かるかもしれないが、人間は養成されない。だから、その到達点よりさらに先に進もうとするときに、イージー・ゴーイングをやってきた人は挫折してしまうが、難関の道を歩いてきた人は、次の難関も容易に乗り越えることができる。ここに金の力と人の力との相違がはっきり現われてくるんだ。最小労力、最大効果の原理は「物の国」の考え方であって、人を重んじる「人の国」では、人を養成することが大事だから、努めて難関を歩くということになる。

ぼくが開店以来、資本家・金持の金を使うことをせずに、一方においては大地域小売業という、資金がいくらでも要る方法を採ったということは、非常な難関を歩いたということだ。それから終戦後、世界石油カルテルに対して闘いを挑んだということも、難関を努めて歩いたということになる。今でもわれわれは、政府とたたかいつつ、自ら進んで難路を歩いている。そういうわけで、愛をもって、人を育てて、努めて自分が率先して難関に向かう、ということが基本だ。この愛情・信頼・鍛練の道を実行した結果、出光にはいくつかの非常に変わった特徴というものが出来上がっているわけなんだ。

14、出光の七不思議

出光　出光には馘首がない。出光では、入社した社員は子供が生まれたという心持になって、これに愛の手を伸ばして育てることになっている。親と子供の関係というものは、これは理屈や利害の問題じゃない。無条件に子供の将来を考えるということだ。親子の間が親愛の情をもって結ばれるのは、世界中の人も同じだが、他人に対しても子供が生まれたという感じをもちうるのは、日本人の特徴じゃないかと思う。ところが子供は、難関にぶつかるとやめたがる。いったんやりかけたことをやめる、ということは、ちょうど若木の芽をとめるのと同じで、小さな松で終わってしまう。枝は出るが、枝は枝であって幹ではない。それと同じだ。子供が途中でやめると、その人は人間としては、すでに落伍していることになるという考え方から、やめさせなかった。外国の経営学からいえば、一つの会社におっても、高い給料をもって雇いにくれば、それがたとえ同業者であっても平気で、よその会社に行く。またさらに高い給料をもって迎えにくるところがあれば、そこに行く。外国では、そういうふうに、いくつも会社を変える人が有能な人となっているようだが、日本ではそんなことは許されない。そんなことをやったら人間はすたる。やりかけたことは、事の如何にかかわらず、終始一貫やれ、というのがぼくの方針だった。

（以下次号へ続く）

経営とは何か

PFドラッカー

仕事をするためには適当な道具が必要なことは当然だが、それにしても日立造船が実験に必要なタンクをもっていないが、運輸省のタンクを利用して実験を行なっている。こういうことは、非常に高価な施設をうまく使っている良い例であろう。

アメリカの研究所長がやりがちな、これがどうしても必要だから買うのでなくて、そういうことが流行しているからという理由で非常に高価な設備機械を借りたり買うというやり方は、極力避けるべきである。たとえば、これからアメリカの物理学会の大会があるというときに、そこに当社の代表としてゆく場合に、極低温実験室の設備がないというのははずかしいという論法は出さないことである。

もう一つ念頭におかなければならないことは、研究設備が複雑になればなるほど、真の研究員でなくて、その機械設備類の保守に当たる人員が非常に多くなってくる、という点である。たとえば電子顕微鏡がどうしても研究に必要という場合には買う必要があるかもしれない。しかしこれは電子顕微鏡ごっこに専念している二人のよけいの人間をかかえ込むという覚悟の上でなければいけない。そういった設備がどうしても必要な場合には、これは買わざるを得ないと思うが、設備に付随する人員というものを忘れてはならない。

なお、成功をおさめている会社と、一般のレベルをたどっている会社との差異というものはどこにあるかというと、これは統計的にはほとんど意味がないほど差異が小さいということがいえる。ただ見られることは、真に成功をおさめている会社はなにか事業を行なう場合、一時にこれに資金や、人間を投入する。そこで成功しなければときを移さずそれを放棄してしまう、といういき方をしているように思われる。

そこで結論づけるならば、真に成功をおさめている会社というものは、すでにもう昨日のものになっているものに対して、資源の投入を中止する時期をよく知り、そして将来のあるものに全力をそそいでいくというやり方をとっているといってよい。多くの企業を見て感ずることは、その全能力のうち、きわめてわずかの力しか発揮させていないということである。これは個人の場合でも、相当の能力をもっていながら、日常はそのごく小部分しか使ってないということと同じだといってよい。

この企業すべての能力を発揮させることが企業を発展させる大きな要因といえる。それが企業家としての最も生産的な課題である。

（次号へ続く）

文久三年四月　吉田主水致兼

“上京道中日記”

松崎武俊

この度、松崎武俊氏の御好意により「文久三年、吉田主水筆の“上京道中日記”」を掲載します。

文久三年（一八六三）は、江戸時代から明治新政府へ移る過渡期にあたり、徳川三百年の封建体制は大きく揺ぎ、尊王攘夷大政奉還の世論は全国に満ち、五年後の慶応三年、徳川慶喜は大政奉還を乞い、同年十二月九日王政復古の大号令が下る事となる。

この頃、全国神社の祀職に携わる者の印可等は、京都吉田家が掌握し、吉田家より許しを得ねば祀職を継ぐ事が出来ない状勢にあった。

文久三年、時の宮司深田民部之丞は、配下の者達を率いて上京し、十一月二十三日吉田家より、風折烏帽子（かざおりえぼうし）、狩衣（かりぎぬ）の著用を許され、同月二十八日従五位下遠江守に任ぜられた。

この道中日記は、京都吉田家に行く間の模様を記したものである。

十九日出立
大宮司　深田民部之丞
日並　清記
吉田　主水
亀石　貞四郎
脇野　善十
上妻治右エ門
右同行

十九日、晴天木屋瀬泊り、角屋藤右エ門宅随分結構なるかまへ、九ツ（夜半十二時）頃より雨降る。

廿日、黒崎浜屋作五郎宅にて中飯しまい、しばらくが間、舟のせんさく致し候。始め十二両と大いに高し、あとよく〳〵差し引きして八両に負くれども、陸より割方わるし、それ故舟は止む、賄は一人三度という、また外に別船の広島船頭まいる、六両二歩に運賃極め乗る。

木屋瀬朝七ツ（四時）立ち契約仕り置き候処、同宿へ柳川の家老泊りにつき、その上公儀役人も泊りの由、朝出差し合い候につき、ざんじ御待ち下され候様、町役人より断わりに参り候につき、しばらく待つ、それ故黒崎へ四ツ半頃着く、九ツ頃に弁当焼かせ本膳すわる。飯代百六文支払いて舟の極めすます、八ツ頃より舟の上にて、酒の肴にイカなど沢山煮しめ、心よく呑み侍る。

廿一、朝曇天後は晴天になる。舟にて手水をかい、あがたに上り沖を見る。また島々山々は多く見侍れども、名さえ知り侍らねど二島一ツの名を聞き侍りて。

〽岡へより、沖津二島、あるが中に、舟こぎ渡す、今朝の暁、

四ツ頃岡田宮（黒崎町）に参詣す、景色も随分よし、神殿拝殿彫り物等大いに手入なれども、細工甚だくどし、大金かかりたる由なれども、それほどには手ぎれいにはなし、龍鹿猿それにつぎ松すゝきなど、さまざまな彫り物多し。

九ツ半頃黒崎の波止より出航いたし、小倉大里を右手に見かけ、舟おだやかに通りければ、八ツ半（三時半）頃下ノ関に着く。それより亀山八幡宮へも参詣す。ふもとに大師あり参る。甚だ見事なる所多し、その日廿一日の事なれば、供え物なれば新しく上る。町内も少々は見物して歩行す。その外寺々は大師参りと見えて、所の妹ども大勢連れて徘徊すること、にぎ〳〵しき事どもなり。それより又右手には早鞆様を遥拝す。

次に田ノ浦という処を遠見す、亀山様には感応という相近の書ける額かゝれり、また左の沖には誠にとがりたる島あり、それはむかし神功皇后の三かん退治の時、神々の集まりましまして、干珠満珠の玉出し処とかや云々

“つづく”

筆者紹介

“道中日記”の著者、松崎武俊氏は八幡警察署の刑事さん。

氏は古文書に趣味を持たれ、収集家としても著名である。

数年前、宗像警察署に奉職中、偶々道中日記を見つけられ、全文を書き下しに直され、此度本紙に寄稿されたものである。

宗像薮庵先生百話

南方華やかなりし頃

宗像太郎坊

坊ちゃん軍医

雪隠学校と呼ばれた分教場を出て、私の姓と同じ中学校を卒業し、五高入り。ここでやんちゃの性格をそなえ、九大小野寺内科でおだてられて大陸進出、華北交通の天津鉄道病院勤務。医者のまだ尊敬されていた頃で、飲んでも飲んでもサラリーが残って困っていた。

田舎出の私は過去の御馳走不足にレジスタンスを持ち、毎日ビフテキ。おかげで太鼓腹となって、一米五八糎の小男が体重七二瓩。よし、これなら徴兵検査確実不合格と、然し更に用心のため、朝、糞もせず、水一升飲んで検査場に行ったが、なんのことはない、昨日の医者達が全員不合格となったので、長の本科の中佐殿、カンカンになって、今日の医者どもは検査無用、全員甲種合格を言い渡された。無念残念、外に出て、辛抱していた糞も小便も出して、ヤケ酒を飲んだ。

夜中の一時頃、運転手を殴って日本租界の留置場入り。この夜、中原公司という天津一のデパートがめらめらと燃えているのが鉄格子から見られた。予の留置場入りを祝福するかの如く思われた。翌朝、房内の拭き掃除のことで同房のスリと喧嘩、こいつに一発くれてやったため、罪状追加。五日間の判決であったが、入営するというので、一日にまけて貰った。

いよいよ天津駅出発となる。フォームには二百人の見送り。どこか私にもいいところがあったのだろう。若さの言葉をかけてやっていた看護婦や、食堂の姑娘が泣き出した。俺が、みんなに手を出したのではないぞ、と男達に弁解したかった。ウィスキーが砲弾のように窓から放り込まれた。おかげで山海関も安東もいつ過ぎたか、支那、満州、朝鮮の三カ国をアルコール性昏睡状態で通過。

扶余という所の愚妻の家に寄った。田の畦を通り、つるべ井戸の家。調査不充分だった。これなら俺の家の方が立派だった。帝大を出て、こんな家から嫁を貰うのなら勉強するんじゃなかった。宗像郡の某駅より入営。親の威光で約二百人の見送り。ではお元気で、はあ有難うございますと、頭を下げようとすると、コツン。鉢合せである。いやどうもと云っても一度頭を下げ、ここらでよかろうと頭を上げてみると、依然向うさんはまだ下げている。

これでは失礼に当ると、もう一度頭を下げようとすると、今度は逆に上って来た向うの頭で、いやというほど、おでこを叩き上げられた。クラクラッとして、入隊前に戦死するところであった。世の中は一寸したことでも慣れないと仲々うまくいかないものである。

（以下次号へ続く）

我楽苦多告知板

お酒の好きなA君、紅茶に滴らすウイスキーを社内に募金して購入した。四、五日経った午後、紅茶が出たので皆ながA君にウイスキーの事を尋ねた。

A君「ウイスキーは確かに購入しました。ここ二、三日暑かったでしょう。ウイスキーのアルコールが蒸発したんですね、アルコールが蒸発するとエキスが残るんですね、私は初めて見ました。私はエキスだけを紅茶に入れて飲んだのです。だからもうウイスキーは有りません」

一同「………？」